

センター新刊書紹介

Medical Problems in Southeast Asia. Noboru Higashi, ed. Symposium Series IV ; 1968. viii + 125 pp.

本書は、1966年10月京都で開かれた「東南アジア医学シンポジウム」の内容をとりまとめたものである。

実は筆者もこのシンポジウムに参加、招請講演の座長に指名された一人として、かなり真剣に勉強したつもりであったが、いまあらためて本書を手にして、あのシンポジウムをよくここまでまとめあげたものだ、との感慨を禁じ得ない。

このシンポジウムは、京都大学東南アジア研究センターが、厚生省、海外技術協力事業団と共同主催したもので、日本では最初の企てである。「現代、世界のどこかのすみに、飢えと病気に脅かされている人達がある間は世界に真の平和はもたらされない。即ちこれらの地区への医療協力は、世界平和にもつながる大きな意義をもつものと言えるでしょう」という世界観の上に立った岩村忍前所長のあいさつは人々の共感を呼び起こさずにはおかないであろう。

シンポジウムの主題は、寄生虫、ウイルス性疾患、性病および結核。論文は衛生事情、医療協力、ライ、むし歯、神経疾患、眼疾患および成人病である。これらの内容を順を追って紹介しておく。

論 文

1. 東南アジアの衛生事情：曾田長宗

膨大な資料を二つの表にまとめて説明してある。第1は各国の人口動態で、これによってその国の公衆衛生の技術と思想が推測でき、また医療サービス機関の整備状況も示してある。第2には各国の主な死因と、多発する疾病を1から5までランクしてある。これをみれば各地域での主要疾患は一目でわかる。最後に著者は、新興国家への協力は医療技術教育の面に力を注ぐことが最も大切だという。

2. 海外医療協力の実情：若松栄一

医療協力とは何ぞやの定義から説き起こし、その意義、わが国における一般的な技術協力の姿を述べ

たものであるが、最後に医療協力の問題点と今後の方向を次の諸点に要約している。医療制度と施設の実態調査、研修員の受入れ、専門家の派遣、現地センターとの提携、熱帯医学研究機運の促進、機械の供与および対象地域民間ベースの医療協力について卓見を述べた。座長平沢興は同じところへ出かけ、同じような研究を先陣争いするような馬鹿なまねはやめて、できるだけお互いに横の連絡をよくし、東南アジアに対する真の総合的な仕事を進めてゆきたい、自分自身が南方ボケといわれるくらいスケールの大きい人間になることが何よりも大切だと付言している。まさに頂門の一針ともいうべきか。

3. タイ国のライ特に小児ライに関する現地調査：岡田誠太郎

著者は1966年西占貢教授と共に現地で綿密な調査を行ない、日本の患者とタイ国のライについての症状を比較し、一方多数の小児のライ検診を行ないかつツベルクリン反応と、レプロミン反応を試みた所見を述べている。それによると、小児のツ反応とレ反応はほとんど相関がない、レ反応の陽転はライ菌感染の結果とみるべきであるという。元来レ反応はライの病型決定に意義あるものとされているが、著者の所説によると、この反応を応用して小児のライ菌汚染度を測ることも可能であるように思われる。岡田らがライ流行地の小児ライに着目したことは慧眼ともいうべきである。

4. 東南アジアにおけるむし歯の問題：美濃口玄

東南アジアの口腔内疾患とその診療の概況について述べ、ついでタイ国のむし歯に関する資料について報告している。ことに10~19才、20~29才のDMF歯粉が日本やアメリカに比べ非常に少なく、地域的には北部が中南部に比べ少ない。食生活との関連について考察し、ことに興味ある問題として、台湾とタイで砂糖消費量にあまり差がないのに、むし歯の罹患率がかなり異なる点を取りあげている。これらの諸問題の解明が、むし歯の発生機序の解釈に大きな示唆を与え、ひいては東南アジア諸国の今後の生活水準の向上に伴うむし歯の増加を抑える示唆を与えることになると思われ、今後の成果が期待される。

5. タイ国における二、三の神経疾患：白木博次

過去10年間近く日本では狂犬病の発生をみていないが、東南アジアでは依然として発生しており大きな脅威である。しかも神経組織を含む予防ワクチンが使用されている現状は大いに問題である。著者は主としてタイ国における狂犬病ワクチンの副作用を対象としてこの問題に鋭くメスを加えている。日本では戦後の10年間にワクチン接種した約1万3千人のうち0.44%にワクチン禍があったのに対し、タイ国では0.04%で、日本の約10分の1というが、これは調査のやり方の差で、日本のような正確な Survey をやればより多数のワクチン禍患者があるはずだという。このワクチン接種は、いわば人における adjuvant をふくまないアレルギー実験といえないこともない。従ってこのような貴重な人体実験が行なわれている実態を、多発硬化症の本態究明へ適用することによって世界の神経学に大きく貢献することができるであろうと、率直かつ大胆に基礎的研究の必要性を説いている。

6. タイ国における眼科疾患：浅山亮二・上野一也

著者は、タイ国の三つの医科大学眼科と公立病院および政府側の眼科診療体制を視察し、また盲人施設やライ療養所までくまなく調査して眼科疾患に対する一般国民の関心が低いことを指摘している。特に失明の原因の50%が Trachoma およびその角膜炎にあることを挙げ、タイ国眼科の技術的水準が近代的水準に近いというのに Trachoma による失明者がかくも多数に上っているところに問題があるという。

7. セイロンにおける成人病の調査：前田如矢

著者はセイロンの農村、漁村、工業地区、高原地区の4個所を選んで、動脈硬化と心臓の慢性虚血性疾患を調査した。30才台の高血圧の出現率が日本に比べはるかに高く、ことに拡張期圧の高いものが多くみられた。心電図では ST-T 異常の出現率が各地区を通じて日本よりかなり高い。その他尿、眼底、肺換気機能等の検査の結果をのべ、また以上の諸検査成績と気候、食生活との関連について言及している。そして心血管系疾患がセイロンでかなり多いと推定されるが、現在まだ mass survey もほとんど

行なわれていない。セイロンには結核、マラリア、フィラリアも現在少なく、熱帯地域としての特色はかなり失われつつあるが、今後は先進国と同様に成人病に対し関心がむけられるべきであると述べている。

シンポジウム

第1主題「寄生虫」座長：森下薫、第2主題「ウイルス性疾患」座長：東昇、第3主題「性病」座長：伊藤賀祐、第4主題「結核」座長：内藤益一、

以上はいずれもトップレベルの専門家を集めて行なわれたものである。

寄生虫部会では基礎的研究のうち蔓延状況、発育史、保虫宿主などに関する研究は各自国の学者が担当し、一方、皮内反応抗原、治療剤、殺虫剤、殺菌剤などの開発改良は日本国内でも行なえるのでその成果を東南アジアへ供給して協力すべきだと言う。

ウイルス部会では調査範囲がまだタイ国とインドネシアのみであるが、デング熱が重要なものとして取り上げられ、ウイルス研究班全体の問題として横の連絡が必要であることを強調している。

性病部会では梅毒の再増加が問題視され、血清診断法の改善、臨床病理学的研究の重要性を強調した。

結核部会では検診方法、BCG 接種、治療の問題にしばられているが、日本での行き方をそのままあてはめることは到底むつかしく、援助の方法にしても各国それぞれの方針があるから下手な手出しはかえって迷惑がられる。現地の医師、技術者の再教育を行なうがよいという。

現地経験者として、タイ国のウイルス病について伊藤利根太郎、カンボジアの結核対策について馬杉雄達らの述べた報告が総合されている。

当日の討議の最後に医療協力と題して小川良治（海外技術協力事業団）の報告があったが、アジア・アフリカ諸国の要請に対する医師、技術者、薬品器材の援助の現況を説明したのち、小川氏は技術者派遣には言葉の問題が一つのネックだといい、また協力はおしつけ的な指導であってはならぬ、「アジアは一つお互いの繁栄と幸福のために、われわれは手をつないでゆこう」という心がまえでやらねばならぬと述懐した。（西村 貞二）